

Contents

\*\*\*\*\*

特集：自民党総裁選挙をめぐる虚実	1p
< 話題のベストセラーから >	
”Living History—August 1998” 「ヒラリーの苦悩」	7p
< From the Editor > 「ヒラリー待望論」	8p

\*\*\*\*\*

特集：自民党総裁選挙をめぐる虚実

しばらく鳴りを潜めていた永田町が騒がしくなってきました。当面の焦点は、9月に行なわれる自民党総裁選挙。再選を目指す小泉首相は再選に向けて自信満々のように見えますが、そこは「一寸先は闇」の世界のこと。阻止しようという動きも無視できません。言ってみれば2位以下を10ゲーム以上も引き離している阪神タイガースが、「優勝間違いなし」とはなかなか言えないのと似ているかもしれません。

これに加えて来年6月までに行なわれる解散・総選挙の時期と、危なっかしい日本経済の行く末が気になります。徐々に政治がエキサイティングな局面を迎えつつあるようです。

再選はもう決まったか

政治という行為を「政務」(politics)と「政策」(policy)という要素に因数分解するならば、40日の会期延長が決まった後の通常国会は、限りなく前者が重い季節といえそうだ。イラク支援法案や三位一体の改革、生保の予定利率引き下げといった案件が重要でないはずがないのだが、すべての案件に影を投げかけているのが3ヶ月先に控えている自民党総裁選挙である。

政権政党のトップを決める総裁選は、事実上、日本の首相を決めるイベントである。しかも次回から総裁任期が3年となることから、小泉首相がここで再選されると、総裁としての任期は2006年9月までとなる。自民党政権が今後も続くようなら、2001年4月の就任から通算で5年5ヶ月となり、中曽根首相(4年11ヶ月)を抜いて佐藤栄作首相(7年7ヶ月)に迫る。なんと歴代2位の長期政権になる可能性があるわけだが、これをもって永田町では、「大勲位を超えてノーベル賞を望む」と称するらしい。

さらに3年間、小泉政権が続くということは、自民党内の反小泉勢力にとっては我慢がならない話であろう。これは「あと3年、冷や飯を食ってもらいます」と宣告されるに等しい。すなわち、与党議員であるのに政策に関与することができず、閣僚などのポストは回ってこず、マスコミからは「抵抗勢力」のレッテルを貼られ、しかもこの間に世代交代はどんどん進んでいくのである。

数だけを比べるならば、自民党内の小泉支持議員は少数派だ。反小泉勢力が結集すれば、引き摺り下ろすことは可能なはず。さらに言えば、今回は地方票の動向が気にかかる。**自民党総裁選における有権者は、今回から地方党員の票数300、国会議員各1票の合計約650**となっている。前回に比べて地方票の割合が増えている。

2年前の総裁選では、小泉首相の勝因は地滑り的な地方票の支持を得たことにあった。しかし公共事業の削減などで、地方の自民党員の間では小泉改革への失望感も強い。6月18日には、千葉県議会の自民党千葉県議有志が、亀井静香元政調会長の総裁選出馬を求める決意文を発表した。同党県議71人のうち62人が署名したというから驚く。亀井氏は6月26日には千葉県内で講演し、「小泉政治は確実に終わりにさせる」と宣言している。

こんな調子で地方が「反小泉」に動けば、政局転換が起こり得る。にもかかわらず小泉政権は、三位一体の改革における補助金の削減など、地方の反感を買いかねない動きを進めている。再選への死角はないのだろうか。

### 自民党を支えている小泉人気

小泉首相の自信には裏付けがある。どこの新聞の世論調査を取っても、小泉首相支持は5割以上あるが、自民党支持は25%程度である。すなわち、**「自民党は嫌だが、小泉さんは支持」という有権者が4人に1人いる**のである。

この2年間の自民党は、「小泉人気」という下駄を履くことによって与党の座を維持してきた。仮に自民党が小泉氏を引き摺り下ろし、森前首相のように支持率10%程度のリーダーを担いだら最後、今度は15%の人が「自民党は支持するけど、XX総理は駄目だ」ということになってしまうのだ。これでは自民党が政権の座を滑り落ちてしまうかもしれない。この辺の恐怖感がこの2年間で忘れられてしまっているようだ。

自民党の実力というものを、あらためて考えてみよう。次ページの表は、近年の国政選挙において、各党が比例代表で獲得した票数を比較したものである<sup>1</sup>。党名を記入する比例代表選挙は、「有権者がどの党を支持しているか」という分かりやすい人気投票になる。衆議院はブロック制で参議院は全国区、といった細かい違いはあるものの、各党の人気のトレンドは十分に把握することができる。

---

<sup>1</sup> 本誌2001年8月3日号「参議院選挙の徹底検証」で使ったものの再掲。

### 比例代表での各党の得票数

	2001参院選	2000衆院選	1998参院選	1996衆院選	1995参院選
<b>自民党</b>	<b>21,114,706</b>	<b>16,943,425</b>	<b>14,128,719</b>	<b>18,205,955</b>	<b>11,096,972</b>
民主党	8,990,523	15,067,990	12,209,685	6,001,661	-
公明党	8,187,827	7,762,032	7,748,301	-	-
自由党	4,227,148	6,580,490	5,207,813	-	-
保守党	1,275,002	247,334	-	-	-
(新進党)	-	-	-	15,580,053	12,506,319
共産党	4,329,211	6,719,016	8,195,078	7,268,743	3,873,955
社民党	3,628,635	5,603,680	4,370,763	3,547,240	6,882,919
その他	2,988,440	920,634	4,276,664	4,965,543	6,308,095
有効投票数	54,741,492	59,844,601	56,137,023	55,569,195	40,668,260

ここから見えてくるのは以下のような事実である。

- ・自民党は比例区において、投票総数の4分の1（=だいたい1500万票）は取ることができる。ただし、1995年のように投票率が低いと、1100万票くらいしか取れないこともある。
- ・98年、00年のように、比例選挙における自民党の人気は民主党と大差がない。自民党は地方で強いから、小選挙区選挙では圧勝できるので議席数では大差をつけることができる。しかし仮に自民党が比例区で第2党になっていたら、「どちらの政党が国民の負託を得ているか」ということが議論になるだろう。
- ・ところが2001年の自民党は、例年から500万票程度も上乘せすることに成功している。その分、民主党や自由党の票が食われている。つまり小泉政権誕生によって、自民党は「反自民」の保守層を吸収することができた。逆に結党以来、順調に党勢を拡大してきた民主党は、大きな壁にぶち当たった。

すなわち小泉総裁を担っている限り、自民党は民主党や自由党の挑戦を恐れる必要がない。しかし他の普通の人物が自民党総裁になった瞬間に、「反・自民」保守層の票は自民党を見放すだろう。そして自民党は、再び98年や00年のような脆弱な構造に逆戻りしてしまう。実は自民党は、「小泉マジック」のお陰でこの2年間を乗り切っていたに過ぎないのである。

よく言われる「ポスト小泉の不在」とは、ほかに首相にふさわしい人物がないというよりは、こんなに都合のいい総裁はほかに見当たらない、と解した方が的確かもしれない。

### 衆参の選挙をめぐる思惑

2002年は国政選挙のない年であった。そして次の衆議院選挙は2004年6月までのどこかで、参議院選挙は2004年7月に行なわれる。自民党が切実に「小泉マジック」を必要としていることは自明である。

どちらかといえば、参議院選挙の方が重要度は高い。昨年秋に行なわれた統一補欠選挙において、自民党はさりげなく衆議院における過半数を取り戻している。そして次の参議院選挙で2001年並みの勝利を収めれば、参議院での過半数回復も視野に入ってくる。

自民党が参議院における過半数を失ったのは、遠くリクルート事件があった1989年のこと。参議院選挙は半数ずつ改選されるので、89年の大敗は95年には回復できず、01年の大勝でようやく取り戻せた。しかしこの間、橋本政権下で戦われた98年選挙で自民党は大敗してしまった。04年は98年の改選分に当るので、ここで連勝すれば「衆参両方で過半数」が可能になるのである。

こうなると悩ましいのは、残り1年以内となった解散・総選挙の時期をどこに設定するかである。普通に考えれば、歴史的に自民党が得意とする「衆参同時選挙で大勝利」というシナリオが有力になる。2つの選挙を同時に行なえば規模のメリットが働くから、大きい政党が有利になるのは自然な勢いだ。

他方、小淵政権以来、密接な選挙協力を行なってきた公明党の都合も重く響く。前ページの表にあるように、公明党はいつの選挙でも手堅く80万票前後を獲得している。創価学会の全国組織を動かすには、最低でも3ヶ月程度の準備期間が必要とされ、なおかつあまり複雑な指示を徹底することは難しい。ダブル選挙で、地区ごとに「こっちは誰それ」といった細かな調整をするのは勘弁してくれ、ということになるらしい。

自民党としては、過去の成功経験を重視して来年6～7月のダブル選挙に賭けるか、公明党の事情を考慮して今年秋に「馴れ合い解散」を設定するか、2つの選択肢がある。可能性は半々といったところだろう。

ちなみに通常国会中のハプニング解散の可能性もゼロではない。現時点で選挙を行なった場合の予測を以下にご紹介しておこう。結論は、「自民安定多数変わらず、民主復調も勢いなし」となる。

「選挙でGO」 < 2003年6月20日時点の予想 ><sup>2</sup>

政党	合計	誤差
自民党	265	+ 27 ~ 32
公明党	39	+ 3 ~ 5
保守新党	5	+ 2
民主党	114	+ 25 ~ 19
自由党	19	+ 4 ~ 4
社民党	12	+ 3 ~ 2
共産党	14	+ 3 ~ 2
その他	12	+ 2 ~ 3
総計	480	

<sup>2</sup> <http://makepeace.tripod.co.jp/> 「選挙でGO！」

## 政策論争の場としての総裁選挙を

このように2つの国政選挙が控えているので、目先の自民党総裁選挙も小泉再選で間違いなし、というのが常識的な読みである。

ただし、小泉首相が何でも思い通りにできるかといえばそうではない。経済財政諮問会議による「骨太の方針」が、自民党の反対によって文字通り「骨抜き」にされてしまうことひとつ取っても、今日の「政府」と「与党」の間の溝は深い。そしてこの微妙な緊張関係は、総裁選挙をめぐる火が付きそうな危うさを秘めている。

反小泉勢力の筆頭とされる野中広務氏は、6月16日に大阪市内の講演において、総裁選に対し「(首相が与党の意見を聞かず)議会制民主主義を否定するような状況を争点にしたい」と首相を批判した。この指摘は興味深い。

議会制民主主義の本場、英国においては、与党と政府は完全に一体になるのが当たり前であり、与党の有力議員はこぞって入閣する。そして与党議員が首相(党の総裁)に逆らうなどということはきわめて稀である。あるとしたら、先日のイラク戦争の是非をめぐる造反劇のように、大きなニュースになる。

ところが日本における議会制民主主義においては、「政府」と「与党」が一体ではない。面白いことにマスコミは、「政府・与党」という言い方をよくする。ときには「党高政低」などという現象が生じることもある。過去には、自民党幹事長がいちばん強くて総理を操り人形にする、などということさえあった。現在は「政高党低」なので、党の側に不満がたまっている。ただし、それが議院内閣制の否定であるという主張は行き過ぎであろう。

もちろん英国型が正しくて日本型が間違っている、などということはない。議院内閣制というシステムが、それぞれの国の文化に沿って運用されているということだろう。それでも94年の「政治改革」や01年の「省庁再編」など、一連の改革が目指してきたのは、「強い官邸、党首中心の討論、政権交代可能な二大政党制、そして金のかからない政治」といった姿である。実際にそうした変化は着実に進んでいるのだが、現実の永田町が時代に追いつけていないのではないだろうか。

できることならば、総裁選挙は派手に行なわれた方がいいだろう。小幅の政策転換や内閣改造をえさに、反小泉勢力と妥協して再選を果たす、という手がないわけではないが、それをやっては「小泉純一郎」ではなくなる。むしろ総裁選挙に3人以上の候補者を出し、勝ち負けをはっきりさせた方がいい。はっきり「政府=与党」という体制にしないことには、強いリーダーシップは不可能だからである。

昔の自民党総裁選挙といえば、金権選挙あり、実力者による候補者の面接ありという魑魅魍魎の世界だった。ところが、直近数回の選挙では経済政策を徹底討論する絶好の場となっている。98年の自民党総裁選は、「凡人」小淵恵三氏の景気回復最優先政策が勝利し、「軍人」梶山静六氏の「ハードランディング論」を退けた。そして01年の選挙では、小泉純一郎

氏の「構造改革」論への支持が、他の3候補の経済政策を上回った。それぞれの判断が正しかったかどうかはさておき、政策を決定する政治的なプロセスとしては有効だった。

03年9月の総裁選挙も、向こう2~3年の経済政策を方向づけるチャンスとすべきではないだろうか。日本経済の現状は深刻であり、今の政策を漫然と続けているのでは、どう考えても展望は開けてこないと思うのである。

## 当面の政治日程

最後に今後の政治日程について簡単にまとめておこう。

小泉首相としては、秋の政治日程はなるべく柔軟に構えたい。そうすると気になるのは、今通常国会中に、「テロ特措法の延長」ができるかどうか。もし間に合わなければ、秋には早めに臨時国会を開いて、A P E Cなどの外交日程をこなしつつ、11月1日の期限切れに間に合わせる必要が出てくる。逆に7月中旬に間うようなら、秋は予算を通すことだけ考えればよくなるので、日程的に楽になる。

が、そうすると必ず「そうはさせじ」という勢力が現われるので、一筋縄では行かない。このように、「政務」が「政策」に優先する季節がしばらく続きそうだ。

## 今後の政治日程

7月28日	通常国会会期末 イラク支援法、テロ特措法延長、生保予定利率引下げなど成立？
8月12日	4 6月期G D P速報値発表
8月15日	全国戦没者追悼式
8月18日~	小泉首相訪独？
8月末	2004年度予算概算要求締切
9月17日	日朝平壤宣言から1周年
9月下旬	G 7 財務相・中央銀行総裁会議 <b>自民党総裁選挙 内閣改造？</b>
9月30日	小泉首相の自民党総裁任期切れ
10月上旬	臨時国会召集？
10月20~21日	A P E C 首脳会議（バンコク）
10月26日	衆議院統一補欠選挙投票日
11月1日	テロ対策特別措置法期限切れ
11月14日	7 9月期G D P速報値発表
12月	年金改革案の取りまとめ 2004年度予算案決定 道路公団民営化に関する法案決定
<2004年>	
1月下旬	通常国会召集
6月24日	<b>衆院議員の任期満了</b>
7月25日	<b>参院議員（半数）の任期満了</b>

## <話題のベストセラーから>

"Living History—August 1998"

P 465 ~ 466

「ヒラリーの苦悩」

\* ヒラリー・クリントン上院議員の話題の自叙伝「リビング・ヒストリー」で、読者がいちばん興味を持つ場面を、抜粋してご紹介します。邦訳が出るのは年末だそうですけど。

<抜粋>

翌朝早く、8月15日土曜日のこと、ビルは何か月か前にしたときと同じように私を起こした。このときの彼はベッドの側に腰掛けることなく、行ったり来たりした。彼は初めて、以前の認識とは違い、状況がはるかに深刻であることを告げた。今や不適切な関係があったかどうかについて、証言に立つ必要があることを自覚していた。彼は私に向かい、二人の間に何が起こったかを短く、ぼつりぼつりと語った。7ヶ月前にはとても言えなかった、と彼は言った。なぜなら、それを認めることはとても恥ずかしく、そうすれば私がとても怒り、傷つくであろうことを知っていたから、と。

息が出来なかった。空気を飲みこみ、私は泣き出して彼に向かって大声を上げた。

「どうということ？何を言っているの？なぜ嘘をついたの？」

私は怒り狂い、一秒ごとに怒りは高まった。彼はそこに立ったままで何度も繰り返した。

「すまない。本当にすまない。君とチェルシーを守りたかったんだ」。

聞いている言葉が信じられなかった。その瞬間まで私はただ、彼が愚かにも若い女に気を惹かれているのだと思い、不当な扱いを受けているのだと確信していた。彼が私たちの結婚と家庭を試すようなことをするとは信じられなかった。自分が彼を全面的に信じていたことに対し、私はものも言えないほど驚き、傷つき、激昂していた。

それから私は、ビルと私がこのことをチェルシーに告げなければならないことに気がついた。あなたがそうすべきだと告げると、彼は涙目になった。二人には分かっていた。彼は夫婦の信頼を裏切ったし、それは取り消すことの出来ない落ち度かもしれない。そして私たちはチェルシーに対し、お父さんは嘘をついていたと言わなければならなかった。恐ろしい瞬間だった。この夫婦関係が、かくもつらい裏切りを乗り越えられるのか、あるいは乗り越えるべきなのかは分からなかった。だが私は自分自身の予定に沿って、自分の感情を注意深く働かせなければならないことが分かっていた。

ありがたいことに、その週末の日程表には公衆の面前に立つ予定はなかった。私たちは休暇に立つはずだったが、ビルが大審問に立つまで「マーサの葡萄畑」に旅立つのを延期していたのだ。感情的にはボロボロの状態だったが、ビルはそれから証言台に立ち、全国に対する声明をする準備をしなければならなかった。

## < From the Editor > ヒラリー待望論

世の中には自叙伝を書くような立派な人はゴマンといえるでしょう。ただし、それらが面白いかどうかは、読んでみなければ分からない。評判になるかもしれないし、すぐに忘れ去られてしまうかもしれない。ところがヒラリー・クリントンの”Living History”においては、誰もがモニカ・ルインスキー事件に関する記述について興味津々なものだから、本が出るというだけで評判になってしまう。と、いうことで初版が100万部。まるで芸能人のようなパブリシティです。こんな政治家はめったにいないもんじゃありません。

実際、今の民主党の候補者では、ブッシュに勝てそうなタマが見当らない。ヒラリー自身は2006年まで上院議員としての任期を全うすると言っていますが、できれば2004年の選挙に出てほしいと思います。大丈夫、「私以外にブッシュを倒せる候補者はいないと思った」と言えば、ニューヨーク州の有権者も納得してくれるでしょう。実は「米大統領選挙が大好き」な筆者は、ブッシュ対ヒラリーの論戦を見てみたいくしょうがないのです。

ヒラリーの挑戦は、暇を持て余しているはずの前大統領のビルも大歓迎でしょう。問題は仲睦まじい選挙戦ができるかという点にあります。 ”Living History”には二人が出会った頃について、こんな「ごちそうさま」なくだりもあるのです。

「私はアーカンソーからの若者が、第一印象よりもはるかに複雑であることを理解し始めた。彼はアイデアと言葉を巧みにつなげ、まるで音楽のように聞かせることで私を驚かせた。私は今でも彼の考え方、彼のルックスが好きだ。私がビル・クリントンについて最初に気づいたのは、彼の手の形だった。彼の手首は細くエレガントであり、長い指は器用で、まるでピアニストか外科医のようだ。法学部で初めて私たちが出会った頃、私は彼が本のページをめくるのをただ見ているのが好きだった。今では何千もの握手、ゴルフのスイング、そしてたくさんの署名にねじまげられ、彼の手には年齢が表れつつある。両手は、その持ち主と同じように風雨に晒されてきたが、今もなお存在を主張し、魅力的であり、しなやかである」

こんなのはどうでしょう。2004年、ヒラリーはブッシュを倒して初の女性大統領に就任する。そして2008年、共和党から挑戦したのはジェブ・ブッシュ・フロリダ州知事だった。かくして米国の二大政党制は空洞化し、ブッシュ家とクリントン家による二大王朝制が始まったのである……。

編集者敬白

- 本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、日商岩井株式会社および株式会社日商岩井総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒135-8655 東京都港区台場 2-3-1 <http://www.niri.co.jp>

日商岩井総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-2183

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.com)